

早稲田大学 商学部 世界史 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	一昨年は、記号問題44・記述問題16、昨年は記号問題35・記述問題13・論述問題(100字)だった。今年も記号問題34・記述問題13・論述(100字)でほぼ昨年と同量だった。難易度は昨年とほぼおなじ。論述のテーマは米国史に定着した感がある。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	古代ローマ	問A-2のキケロは教育学部でも出ている。問B・C・D・Eは易しい。問F-3の政体循環論は人間科学部と政治経済学部でも出ている。問Hの年代配列は、3のカラカラ帝を大浴場の建設者としてしか知らないときつい。カラカラは212年のアントニヌス法を公布して帝国内の全自由民にローマ市民権を付与している。この212年がわかると楽勝できる。問Kの年代配列は3のヘラクレイオス1世の時代が想定できるかどうかできまる。	標準
II	EUにおける「多様性における統一」をめぐる	問A-4のケルト人はインド＝ヨーロッパ語系、問B-2のイベリア半島最後のイスラーム王朝はナスル朝が正しい。問C-2のインカ征服は1533年の出来事。問Dは単純な年代配列。対象項目間に因果関係はほとんどないから流れで前後を想定することはできない。問E-1の1799年はテルミドールではなくブリュメール18日が正しい。問F-2のジョゼフ王とはナポレオンの兄。ナポリ王を経てスペイン王となったが、スペイン人からすれば異民族支配を行う軍事政権に過ぎなかった。問H-4は「基盤を固めた」ではなく「挫折した」が正しい。問Iは問Dと違いナポレオン3世関連の事項として3→2→1→4と繋げることができる。	標準

番号	出題内容	コメント	難易度
III	EUの通貨統合と古代中国の貨幣政策	<p>問A-3は他の選択肢がよく見ると荒唐無稽に近いので正確な知識がなくとも選べる。問B-1は厄介な選択肢。マーストリヒト条約(1991)は欧州統合の推進を目的とする条約。その結果EUが発足した(1993)。そのEU首脳会議(1994)で採択されたのがEU憲法だったが、蘭仏両国での国民投票でEU憲法条約批准が否定されて頓挫した。かわりにリスボン条約(EU基本条約の改正)が調印され(2007)、発効した(2009)。</p> <p>問C-2の禹は伝説上の王朝である夏の建国者。問D-1は山西省大同。問F-1は「戦国の七雄」ではなく「春秋の五覇」、2は『詩経』ではなく『楚辞』が正しい。3の李斯が処刑されたのは始皇帝の死後。問G-2の算賦は錢納。問H-3の妻や耕牛にも給田するのは北魏の均田制。問I-1は玄宗ではなく徳宗が正しい。問K-1の「(事実上)丁税を免除」は地丁銀に該当。問Lの幣制改革は英人顧問リース=ロスの助言を得て1935年に実施され、それまでの銀にかわり法幣(紙幣のこと)が統一通貨とされた。</p>	一部難
IV	南北戦争後の米国	<p>記述式の空欄補充は昨年に比べれば易しい。ジェロニモは西部劇が盛んだった頃は小学生でも知っていた有名人。しかし、空欄に入る語句が固有名詞でないものもあり、何かすっきりしない印象を受ける。強弁すれば何を入れても文意としては一応通るが、ここは逆らわず、穏当に語句を選びたい。100字論述は、昨年の「アメリカ的生活様式」に比べると、個人の主観が入りにくいテーマで、単なる用語の説明で片付いてしまう。目的が「西部農民の支持獲得」だけだと100字に達しないので、北部にとって市場の拡大を意味する「西部開拓の進展」も付け加えるとよい。</p>	標準

〔総合コメント〕

マーク式問題のうち語群選択は大半が易しい。それに比べると正誤判定はポイントが些細なものもあるが、早大の他学部の正誤文に比べると文章そのものが短く単純で取り付きやすい。何といても量からくる圧迫感といったものがなく疲れなと思う。一定の実力があれば、何度か読み直すうちにポイントを発見できるだろう。ただ、年代配列問題は年代のストックが相当ないと確実な得点は容易ではない。普段からこつこつと年代を覚えておく必要がある。記述式のうち空欄補充は、年によって難易のぶれが大きい。今年は比較的埋めやすかった。最後の論述は、出題される年とない年があるが、出題を前提に準備すべきである。07年のテーマ「全国産業復興法」、06年の「ブレトン＝ウッズ体制」、09年の「アメリカ式生活様式」というふうに20世紀の米国に偏って出題されてきた。今年も19世紀になったがやはり米国史だった。ここまで連続すれば、来年も当然この分野を前提に準備すべきである。